皇帝

ワキサシ
りうハ故遊ふ入てよ哉
さとし後宮のかれい三千人
下
三千の寵愛一身にありあまつさへの事
なくひな貴妃なからぬ貴乃
きなみさの宮て求奥殿の
下同
ちよろもなし　たゝよハくと
小紫乃雲の前も知りなく世

上ヲ
れはくし乃まのよみづくずの
まさほほもおほろ雲井に
悩るるとも春ちるまゝや
なきやうろ霞のうち乃は桜
ひとへよおしきいのさかく

ミテ詞
いい小姿やへきるのゝ

ゴ詞
かしきや朝宴中まゝはてまとも流

さひて心をすまし給ひわかみに
みえし流もと小来るをさし給へ
ざもかしき万葉老人なわかるも
めいりなるもあら
袖は
伯牙乃絃附に鍾期聴いひしも
なわしりざ及ぶ才の歌えぬ手哉
なかなか玉階よそ頭を打くゝ哉

がなきよ明しゝ光然元方見ゝき
参りたり実さる事を仰し
ありがたまし跪乃うちよおそめ
照官さる我し大将計で元方を
けのためはうゞ家入り来まほう
実しく志訴しめてそれわ照官
のあんり踊袍を免殺ふはうふほ

きうお世入りげさうなきみの
妃後し外ふ貴妃のやまふを
なりけてだとゑをみきしめ
ヤ庵し志りうハ件の内皇鏡を
ばせ枕ふ立置外りしがなしは
こし一ニニゝゝ上清ニゝニニ一ニ三
菜を歌さん收直参りさゝや
一一三ニ一二九ゝゝ一一一一一
あ宇く家海辺力をおゝしはゝ

楊貴妃乃り聲の姿きえし風を
志津か世中もあへはそれぬ
流りしの本にあすなわく
いふきひぐふるいまし――の墨
月のぐらき夕もおぼろ月よ
曉ぬれいかりかある　きりぬや
衣をとる花をくいへむちるも

聲く若きれよあきりめぐる源の
露乃玉葛しうぐえ聲し――や
りいはてりりるもおなとは
か日そくは――ミをへるへ露かと
がを添てゆふしぐろ乃　蛛をも
あ宰ひひ袖ふひや　翠翹金雀
とわくまりぐのさし――の聲も

うきふしや花被紗乃世よ
多くひな美染の服装や妻揃れ
風にさらふ海棠のいきる
まかせしくなわ志の信よ
明皇棠花をまいめらをうもち
色をおもしたきの故だくひ
なかよきひよのく楽里をこめて

逢月の霄尺しの影を若人
びたの身靴出羽まはわきても
限く小縮るるさなかなる中なれと
私のさしや世中は思ひぬ
さらわる明の月乃秋の藤楽さ
まかなひ残を保楽さもなく秘曲
つ庵しふえけ新ざちと小哥

なれや此菊つゆ天長く地久長て
流く流時もきまし　平詞　実に思ひ
出しうわば悦き人の君乃ちとせ
帝皇鏡をとわいうは法枕を
奉つ義なわ　黄鐘　勅流もはとも
志の流をしと月乞雲来一同よ
帝皇鏡をえいたし侍枕ちりき

みちやまがえへうちつ
なきゝわ宝　上音 地　列くて飛行
雲乃あしづくだくらふのさも
深しくが孫けもよう流折流よ
みしき御鏡の君うち舟鬼神の
海子法皇毛国　九重乃帳を
我し流毛しづく悦けまくうに

よわさけの箒をゝはらひとわさし
あ寧窓ゞきミよ孫さらへ氣色
鏡ふうつはわろし宇状はげつぞ
見我嶮魍河伯ゆすぎそくハ病鬼ら
乃うさしと剣を抜て立給へハ
天にありてハ星地ふまゝ下まで花行
百王を護しく御門にせうひ

ひのうかをなをば剣をつわあん
きわ然西尽由殿の柱に立隠て
ひのさも及しひう路了くろわ
ツヨ吟上 かしきやくもる宂りきて宮中
ひわのしやきえ鳴響ひるさう
おう殊し宮き　後ヨ吟上 拂見ハ武德を
中に賂官きう状し鍾馗大臣の

精霊也梅も此君翠黛し竹に
光妃乃風まふ我たいしきんと
通力をもちて奇瑞をあらはし南無
天狗星王剣降鬼と紛なたる
又は楽しみ虚空をかけりて
家丹をつき悪鬼を之挫き我ける
よりもく霧蓬をはますき柱に
隠れ給を鐘楼の精霊せまはれ
おわしますが利益を以てまき被を
りきし比皇鏡にせうひ給へは
鬼神乃姿を隠しも則し鬼神を
通力も在らず程てくわきたて
まろひつりし星の絵を遁ゆめ
なかまの人に御殿を花おつ之六宮の

お陰よ吉ありはなのりきしも
なをとろおかし制海をふかあけ
つさくまきわいなし夜上よ
あけしてゝ包よ貴妃も皇貴猶は
君の恵をあふき当乃神とあは
庵しとお孫を孫しまるく
て姿は夢とうなわよ是也